



# 大阪国税局長賞

## ちゃんと受けとったよ

大阪府立大手前高等学校 1年 渡部 光

私は昔から目が悪い。どのぐらい昔かという、二歳になる頃にはメガネをかけていたぐらい昔のことだ。家の近くにある保育園に通っていたが、メガネをかけていたのは、園内で私一人だけだった。そのせいで仲間外れにされたことも、陰口を言われたこともよくあった。今になると幼稚な行為だと気にせず過ごす、当時六歳にも満たない私にとっては毎日が苦痛でしかなかった。

目の手術も今まで三回受けた。しかし手術は私にとって注射が痛いだけで、嫌いではなかった。むしろ楽しかった。いつもの定期検査では見ることができない、複雑で目新しい医療器具や、私用に作られた院内食、定期的に声をかけに来てくれる看護師さんも優しくて、とても居心地がよかった。

退院の日、私は手続きを行っている母の所へ向かった。出来心で手術の費用を尋ねてみたところ、母は私に費用の明細書を見せてくれた。恐る恐る見てみると、私は驚きを隠すことができなかった。なぜならそこにはほんの少しの金額しか書かれてなかったからだ。具体的な数字は覚えていないが、少し良質なディナーを一週間食べたら余裕で賄えるぐらい少ない金額だった。こんなたくさんの種類の医療器具を使い、こんなに清潔で頼もしい医療従事者の方々が私の目のために動いてくれているのに、この金額。ありえるわけがないと母に聞くと、この費用の四割程度は国の税金で賄われているのだそう。税金は学校で習ったり、物を買った時のレシートに「消費税」と書かれていたりするだけで、あまり身近なものではなかったので調べてみたところ、毎年百兆円にも上る国の歳出の約三分の一が社会保障に充てられており、その一部が私の入院と手術の費用として使われているそう。もちろん、国の歳出は税金で成り立っている。また、私が入浴と寝る時以外常に身に付けているメガネも、国から補助金が出ているのだ。

こんな私一人の目のために、国民のみなさんがお金を出してくれている、と言ったら大袈裟かもしれないが、私はとてもうれしかった。おかげで今は高校に入学し、いつものようにメガネを掛けて勉強したり、友だちと楽しく話をしたりしている。私がこの目で十六年間生活できているのも、税金のおかげと言っても過言ではないのかもしれない。

いつも通っている病院にはたくさん絵が飾ってある。私はその中でも花束の絵が好きだ。

私は税金は花だと思った。国民一人一人が花を渡し、国がそれを集めて人ごとに合った形に切りそろえ、花束にして、私のような困っている人々に届けてくれる。受け取った人々はたちまち笑顔になる。

そのとき、私は国民から花束をもらった気がした。

そして、私はその人々へ向けて言いたい。「ちゃんと受けとったよ。」と。